

## ハイデルベルク大学南アジア研究所 -研究組織と大型プロジェクトを中心に-

著者	山下 博司
雑誌名	国際文化研究科論集
号	20
ページ	191-204
発行年	2012-12-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/55585">http://hdl.handle.net/10097/55585</a>

# ハイデルベルク大学南アジア研究所 (Südasiens-Institut, Universität Heidelberg)<sup>1</sup>

—研究組織と大型プロジェクトを中心に—

山下 博 司

## I. はじめに — 訪問の経緯とキャンパスの概要 —

ドイツ連邦共和国のハイデルベルク大学・南アジア研究所 (Südasiens-Institut, Universität Heidelberg)<sup>2</sup> について紹介を試みたい。南アジア研究に特化されているという点を除き、言語・文化・社会・地域研究等を専門とする多彩なスタッフを擁し、研究・教育・組織運営のほか、学内関連施設との研究協力面などにおいて、本研究科にも示唆するところを少なからず有していると思われるからである。

ハイデルベルク市は、地勢的には、ネッカー川がオーデンヴァルトの丘陵地帯からライン川沿いの平野部に出るあたりに位置する。比較的温暖な気候に恵まれ、周囲には果樹園や葡萄園を伴う長閑な田園風景が広がっている。

ハイデルベルクは言わずと知れた国際的観光都市である。とくに市域を東西に貫くネッカー川の南側、河川と平行してビスマルク広場からハウプト通りに添った旧市街地 (Altstadt) と、カールス・プラッツ付近からロープウェイで通じたハイデルベルク城、およびそこからの旧市街の展望が観光の目玉となっている。

観光スポットが集中する市中心部 (Innenstadt) からネッカー川を挟んだ北側一帯には、東のノイエnheim (Neuenheim) から西のイム・ノイエnheim (Im Neuenheimer Feld) に至る平坦な土地が開けている。かつて農地として新たに切り拓かれた場所とも聞いたが、イム・ノイエnheim (Im Neuenheimer Feld) は今や一大文教地区へと変貌を遂げている。喧噪を離れたこの区域に、ハイデルベルク大学の新キャンパスも立地している。広々とした構内には、理工系や医学系の学部・研究所群、大学病院・病棟群、附属博物館、植物園、メンザ、ゲストハウス、レストランなどが建てられ、重厚だが狭隘な旧市街地内のキャンパスとはさまざまな面で著しい対照をみせる。理工系・医学系の部局・研究所・病院が大きな新キャンパス内に集中しているという点で、同じ歴史都市に立地していても諸施設が市内各所に点在している同州のテュービンゲン大学等とは大いに趣を異にしている。

南アジア研究所はこの新キャンパスの一角を占める。独立した多層の近代建築で、附属図書館や簡易宿泊設備も有する。歴史学科など、南アジア研究所に関連する部局の多くは川向こうの旧市街にあり、既成の学科と兼担する教員も少なくないが、両キャンパスは、後述するベルクハイム地区の関連施設とともに、互いにはほんの数キロしか離れておらず、バス、トラム、自転車（あるいは徒歩）などによる各キャンパス間の移動も容易である<sup>3</sup>。

筆者は、ドイツをはじめて訪れた1980年12月以来、ハイデルベルクに都合5、6回程度足を運んでいるが、直近の2回（2010年3月、2011年10月）は、日本の研究組織（人間文化研究機構国立民族学博物館）との協力関係構築の事案に関係した訪問である。そのうち一昨年（2010年3月）のものは、ヘッセン州ヒュンフェルトにあるカトリック・オブレート会のボニファティ

ウス修道院に赴き、キリスト教書誌学・宣教学の大家ヴィリ・ヘンケル神父<sup>4</sup>（P. Prof. Dr. Willi Henkel, OMI; 教皇庁立ウルバニアナ大学名誉教授・米国カトリック大学名誉博士）と再会し意見交換を終えたあと、上記用務を帯びて数日間南アジア研究所を訪問したものである。それに対し2011年10月の訪独は、専ら国立民族学博物館・現代南インド地域研究拠点の統括責任者・三尾稔准教授（文化人類学）に同行してのもので、先方の教授たちと両組織間の将来的な研究協力の可能性等について協議を行った。

筆者と南アジア研究所とのご縁は、後述するハンス・ハーダー教授（Prof. Dr. Hans Harder）の前任者で、当時南アジア研究所の近現代インド学講座の主任であったモニカ・ベーム・テッテルバッハ教授（Prof. Dr. Monika Böhm-Tettelbach、ヒンディー文学、ラージャスターンを中心とするヒンドゥー教研究）と接触し、二度にわたって文部（科学）省の長期在外研究員への推薦書を書いていただいたことに遡る。この間筆者の名古屋大学から本学への異動なども挟まり、ハイデルベルクでの在外研究は結果的に実現を見なかったが、そのことが機縁となって、一昨年、事前にテッテルバッハ名誉教授から現学科長のハーダー教授をご紹介いただき、教授とメールで実務的やりとりを経た上で訪問実現となった。その後（2011年）も含む計2回の滞在が功を奏し、筆者が介添えするかたちで同研究所と国立民族学博物館との研究協力が緒につく見通しとなり、とても慶ばしく思っている。

本報告では、直近の2回の研究所訪問で得たファーストハンドの情報なども織り込みながら、ドイツの東洋学および研究施設の現状の一端を紹介したい<sup>5</sup>。



古城からのハイデルベルク旧市街  
（左上方に、大学図書館、学生牢方面を望む。2010年3月、筆者撮影）

## II. ハイデルベルク大学と学者たち

ドイツ連邦共和国バーデン・ヴュルテンベルク州にあるハイデルベルク大学（正式名称ルプレヒト・カール大学、Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg、略称 Universität Heidelberg）は、1386年プファルツ選帝侯ルプレヒト1世によって創設されたドイツ最古の大学である。大学の名称も選帝侯の名に由来する。創立当初は4学部にすぎなかったというが、現在は12の学部と数多くの研究所や附属施設を有する研究型の総合大学になっている。民間機関による大学ランキングでも、ドイツで常時トップクラスに評価される<sup>6</sup>。

同大学の公式ウェブサイト<sup>7</sup>に掲げられた記事によれば、29,000人の学生、5,000人の研究・教育スタッフを擁するとある。同州のフライブルク大学とともに、1901年の夏学期からドイツで初めて女子学生を正規に受け入れ<sup>8</sup>、今では学生の半数を女子が占めている。

かつてこの大学で教鞭をとった著名な人文・社会系の学者としては、フリードリヒ・ヘーゲル（1770-1831）が正教授を務めているし、マックス・ヴェーバー（1864-1920）も一時期在職していた。ヴェーバーが記念碑的著作『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を発表したのは、病気によりハイデルベルク大学を退いた翌年、1904年のことである。同大学社会学科は、彼の名をとって Max-Weber-Institut für Soziologie と称している。ちなみに、マックス・ヴェーバーの実弟で社会学者・経済学者のアルフレート・ヴェーバー（1868-1958）も教授として在任したことがあり、経済学科はその名を冠したアルフレート・ヴェーバー経済学研究所（Alfred-Weber-Institut für Wirtschaftswissenschaften）とも呼ばれる。哲学者・社会学者のユルゲン・ハーバーマス（1929-）も、短期間ではあるが教授職に就いていた。

東北大学に関わりのある人物としては、ハイデルベルク大学医学部を卒業し実験心理学の確立に足跡を残したヴィルヘルム・ヴント（1832-1920）がいる。本学心理学講座の初代教授・千葉胤成（1884-1972）は、留学先のドイツで売りに出されていたヴントの蔵書を購入し、日本に持ち帰った。現在、本学附属図書館に「ヴント文庫」として所蔵されている。

こうしたハイデルベルク大学に関係した大学者たちの中で、本稿で紹介する南アジア研究所にゆかりのある人物が精神医学者・哲学者のカール・ヤスパース（1883-1969）である。

ヤスパースは法学や医学を修めたのち、ハイデルベルクの精神科病院で医師として勤務するが、当時の医学界の精神病に対する姿勢に疑念を抱き、精神医学の方法の改良を志向するようになる。1913年にハイデルベルク大学で精神医学を講じ始めるが、やがて哲学へと関心領域を発展させ、1921年から1937年まで同大学の哲学教授を務めている。

なぜインド学者でもないヤスパースが、今回紹介する南アジア研究所と関連するのか<sup>9</sup>。一つには、彼が（ヘーゲルらの考えと一線を画し）西洋文明の普遍性に疑義を呈する文化相対主義的な理念を早くに打ち出した人物として特筆されるからである<sup>10</sup>。その意味で、ヤスパースは、ドイツにおける非欧米圏をめぐる研究の営為にとって、多分に象徴的な意義をもつ人物の一人と言ってよい。しかしながら、これはヤスパースと南アジア研究所との間の、言わば間接的な縁故に過ぎない。実は、偶然も作用してはいるが、より直接的な因縁もまた存在しているのである。そのことはのちにわかるであろう。

## III. 南アジア研究所の概要と二つの「インドロギー」講座

ハイデルベルク大学南アジア研究所は1962年に設立された。当時、ドイツ連邦政府が第三諸国への援助方針の一環として、各州政府に個々の対応を促したところ、他州が現地での各種プロ

ジェクトを打ち出す中、バーデン・ヴュルテンベルク州は南アジアを射程に定め、州内の大学に南アジアの古今の諸問題を扱う研究組織の立ち上げを企図した<sup>11</sup>。こうしてハイデルベルク大学に、研究対象を南アジア地域に特化し、言語・思想・宗教・文化・歴史・地理・政治・人類学・開発経済など人文学と社会科学の諸分野を糾合した、ドイツでも極めてユニークな高等研究教育機関が誕生したのである。中央ヨーロッパ随一の南アジア研究機関と言ってもよからう<sup>12</sup>。今年(2012年)で50周年を迎え、今年の5月に記念週間が設けられ、さまざまな記念行事が催された。

筆者の専門分野とも重なる古典学について言えば、歴史的にも文献学的インド研究(Indologie)のメッカであるドイツにあって、ことハイデルベルク大学は、古典インド学への貢献の足跡において特段卓抜した存在ではない。その故もあろうか。同じドイツ語圏にあって、ハンプルク、マールブルク、ヴィーンなどの諸大学に比べ、日本のインド文献学者でハイデルベルクに縁の深い者は比較的少人数にとどまっている。日本の従来のインド研究は古典学が中心だったため、ドイツやオーストリアの古典文献学に秀でた大学とは一定の関係を築いてきたが、近現代インド研究に実績のある南アジア研究所などの機関との関係は比較的疎遠だったということであろう<sup>13</sup>。

ハイデルベルクのインドロジーを体現する人物に、ナチスに追われるまで十余年にわたりインド哲学・サンスクリット分野のチェアを占めたハインリヒ・ツインマー(1890-1943)がいる。彼は旧来のインド古典学の偏ったアプローチを脱し、神話分析、造形美術、イメージ、シンボル等の問題へと関心を広げ、長い交流を通じて分析心理学者・ユングなどにも影響を与えた。インド共和国政府は、南アジア研究所にインドからの客員研究者のための、ツインマーの名を冠した教授ポスト(Der Heinrich Zimmer Chair für Indische Philosophie und Geistesgeschichte)を寄附し、資金提供を行っている。研究所附属図書館の閲覧室にも彼に因む名称が与えられている。敬意と誇りとを以て偲ばれているさまが窺われるのである。

実にハイデルベルクのインド研究の特色は、ツインマーに象徴されるように、文献学(フィロロギー)のデスクワーク的な手法に拘泥・偏重することなく、多角的・多元的な視座から南アジアの文化・社会現象を解明しようとする点に認められる。文化・社会の動態的側面への着眼もその一端である。古典語を用いた研究も、まさにそうした理念に沿って位置づけられ意義が付与されていると言ってよい。のちに紹介する南アジア研究所の野心的な研究活動の詳細は、そのことを如実に物語っている。

古代インド・アーリヤ語(ヴェーダ語、サンスクリット語)や中期インド・アーリヤ語(プラークリット諸語)を用いる古典文献学的研究と、近代インド・アーリヤ語をはじめとする近現代のインド諸語を扱う研究とは、極言すれば水と油のように和し難いところがあり、両者間の知見の共有や成果の止揚が実を結んできたとはいにくい現状にある。日本もその例に漏れない。欧米においても傾向に大差はない。ところがここ南アジア研究所を訪れてみると、古典学と近現代研究の間の垣根が低く、相互の学問的啓発や知の交流の実があがっている印象を受けるのである。実際のところ、対象とする時代や語種に一応の相違こそあれ、両分野の区分は実体的な意味をなしていないようにすら感じられる。

こうした特徴は、“klassische Indologie”(古典インド学講座、ないしインド学第1講座)のほかに、近現代インドの諸言語と文化現象を扱う“moderne Indologie”(近現代インド学講座、ないしインド学第2講座)と銘打った講座が存在することからも窺い知られる。“Indologie”とは、文字通りには「インド研究」を意味するが、事実上、ヴェーダ語、サンスクリット語、プラークリット諸語など古代～中世の文書資料を対象とするインド古典文献学を指してきた。したがっ

て、多少なりとも Indologie の内実を知る者からすれば、“moderne Indologie” なる表現は一種の「造語」に等しく、概念的に違和感を禁じ得ないものと言わざるを得ない<sup>14</sup>。敢えて“moderne Indologie”と命名した背景には、近現代インドの文化事象を扱う講座であるとの標識にとどまらず、Indologie を「インド研究」という原義に立ち返って再定義し、「研究対象としてのインド」を古典語中心的なアプローチによる占有から解放し、近現代を含むより広い文脈から南アジアの文明世界を把え直そうとする意図が籠められていることが想像されるのである。これは研究所設立の趣旨とも合致するところである<sup>15</sup>。

“moderne Indologie”にもう一つの深意が伏在しているとすれば、厳密な原典批判とテキストの解析をもとに確立されたインド古典学の手法を近現代インドの研究にも援用し、言語的な分析・考察を方法的基礎とする文化研究を標榜するというメッセージであろう。文献学の意義と効力とを認め、それを深めるとともに、その方法論の対象を古代・中世のみに限定せず、近現代の諸現象を読み解く一手段へと換骨奪胎させていこうという姿勢の表明ということになる。これら二つの可能性のうちどちらが正鵠を得ているか、スタッフに直に確認するのを失念したが、いずれにせよ、旧来の伝統的インド研究の枠を越え<sup>しがらみ</sup>柵を脱して、南アジア研究に新しい知の地平を切り拓こうとする本研究所の理念・意欲が講座の命名からも暗に伝わってくるのである。両講座間の人事交流（異動）もある。

上記のことは、南アジア研究所が出版している学術叢書からも明らかである。研究所は、klassische Indologie 講座のアクセル・ミヒャエルス教授 (Prof. Dr. Axel Michaels) が編集主幹となり、2005 年以来ヴィースバーデンの Harrassowitz 社から Ethno-Indology: Heidelberg Studies in South Asian Rituals と銘打つシリーズを刊行しており、すでに 10 点ほどが世に出ている。おそらくミヒャエルス教授らが提唱したに違いない“Ethno-Indology”なる叢書名には、伝統的インドロギーと



新キャンパス風景

(イム・ノイエンハイマー・フェルト地区、正面はゴミ収集車。2011 年 10 月、筆者撮影)

民族学・人類学の方法との融合の理想が籠められている<sup>16</sup>。

インドロギーの枠内で近現代を等しく重視し、それに相応の位置づけを与えようとする動きは、ミヒャエルス教授の着任後に始まったことではない。インドロギー初代チェアのヘルマン・ベルガー教授（Prof. Hermann Berger）らが近現代語に配慮したサブ・デパートメント（準講座）<sup>17</sup>の設置を積極的に進め、ヒンドゥー教の生きた伝統を扱うサブ・デパートメントも発足した。moderne Indologie の講座がサブ・デパートメントからフル・デパートメント（正講座）に昇格したのは、1990年代前半である。ミヒャエルス教授は、前任ベルガー教授の急逝（1992年）後の1996年にハイデルベルクに着任している<sup>18</sup>。このように、近現代インド重視の傾向は、南アジア研究所始まって以来のものと言えるのである。

#### IV. 南アジア研究所の組織と人々

##### （1）講座構成

第1回目（2010年）の訪問では、セメスター終了後だったことと、後述するクラスター・プロジェクト予算の恩恵を受けてスタッフの多くがフィールドに出払っており、目的の3講座のうち2講座の人々としか面会できなかった。2回目（2011年）は、赴いた時期が10月だったためスタッフがほぼ全員揃っており、民族学講座のウィリアム・サックス教授（Prof. Dr. William Sax）とお会いするとともに、インド学2講座の教授たちとも再会が叶い、種々の意見交換を行うことができた。

先述のインドロギー系2講座を含む研究所全体の講座構成は以下の通りである。

Klassische Indologie (Kultur- und Religionsgeschichte Südasiens) (古典インド学)

Moderne Indologie (Neusprachliche Südasiestudien) (近現代インド学)

Ethnologie (民族学／文化人類学)

Geographie (地理学)

Geshichte Südasiens (南アジア史学)<sup>19</sup>

Entwicklungsökonomie (開発経済学)

Politische Wissenschaft Südasiens (南アジア政治学)

2010年3月の訪問時に、ミヒャエルス教授から、開発経済学講座に若い教授が同年4月に着任することになっており、有能な学者でもあることから期待しているとの話を聞いた。これで経済の講座の懸案だった空白ポストも解消され、戦力になっていくだろうとのことであった。2011年10月の訪問時、貧困に関わるミクロ経済学を専攻し南インドをフィールドとするクロンナー教授（Prof. Dr. Stefan Klonner）が着任されているのを確認している。

上記リストで下線を施したものは、2回の訪問で密に接触し得た3講座である。これらは、先述の人間文化研究機構による現代南アジア地域研究プロジェクトのうち、筆者が研究分担者として関わる国立民族学博物館拠点がカバーする分野と特に関連性の深いものである。以下に、これら3講座を軸に研究所のスタッフ等を紹介することにする。

2010年の訪問では、まず近現代インド学科（インド学第2講座）と接触し、2日間にわたって主任のハンス・ハーダー教授と会談するとともに、後述する2件の大型プロジェクトで指導的立場に立つ古典インド学科（インド学第1講座）のアクセル・ミヒャエルス教授とも会って、日

本側プロジェクトの概要や当方の意向・希望などを説明するとともに、両組織の間での将来的な学術協力関係の構築に関わる諸問題について種々の意見交換を行った。さらに、後述する大型学内予算によるプロジェクトの特任管理者であるマルティン・ギーゼルマン博士 (Dr. Martin Gieselmann、中国学) からは、単独かつ長時間にわたって、進行中のプロジェクトの内容、特色、運営などにつき詳細なお話を伺った。

第2回目 (2011年) の訪問でも2日間にわたって接触をもち、先生方からお話を伺った。

## (2) ハンス・ハーダー教授 (Prof. Dr. Hans Harder)

ハンス・ハーダー教授は、ベンガルの作家ボンキムチョンドロのベンガル語による『バガヴァッド・ギーター』注釈書の研究で学位 (ハイデルベルク大学) をとり、マルティン・ルター大学 (ハレ) に提出したハビリタツィオン (教授資格) 論文では、ベンガル・イスラームにおけるスーフィズムを扱っている<sup>20</sup>。研究内容からも察せられるように、博士は語学にきわめて堪能で、筆者が編集したタミル語読本<sup>21</sup>を差し上げると、早速目を通されたらしく、翌日には、それに収載されたタミル語諷刺記事の内容をめぐる話題を出されたほどであった。博士はタミル語もご存じであること、また最近の研究テーマの一つがベンガル文化における「諷刺」の問題であることを、そのとき実感を以て納得させられた次第である。研究者たちと連れ立ってメンザに歩いて行く途中、ハーダー教授に、たまたまインドネシア語の動詞形成における接頭辞や接尾辞の煩瑣さに話を向けると、インドネシア語動詞の接中辞 (infix) について敷衍され、語学の見識の広さに舌を巻いたものである。なにしろ、英独仏伊語を自由に操り、ヒンディー語、ベンガル語、マラーティー語、ウルドゥー語、ペルシャ語、タミル語等のインド諸語もマスターしているそうである<sup>22</sup>。

## (3) アクセル・ミヒャエルス教授 (Prof. Dr. Axel Michaels)

アクセル・ミヒャエルス教授は、オーソドックスなインド学的基礎の上にフィールド調査による方法を加えるという学風を確立しており、方法論的にも主たる調査地 (ネパール～北インド・ガンジス平原) においても、また多彩な研究業績においても、日本の立川武蔵先生 (国立民族学博物館名誉教授) を彷彿させるものがある。(実際に立川先生とは既知であるらしく、そのことも話題に上った。) ミヒャエルス先生は、古典インド学科長としての業務の傍ら、後説するクラスター・プロジェクトと「宗教儀礼の動態」プロジェクトという、二つの大型共同研究に指導的役割に関わっており、きわめて多忙な毎日を送っている。補佐役・ハーダー教授とのコンビネーションの良さも印象に残った。

これら「インドロジー」の二つの講座は、他の講座と異なり研究所専従の教員を擁し、研究所運営のまさに要として機能している。

## (4) 2講座所属の若手研究者たちと就職問題

二つのインドロジー講座については、ほかに若手研究者10名ほどともお会いし、研究内容について紹介いただき、意見交換や情報交換を行った。個々の野心的な研究テーマから、彼らの熱意や学問的水準の高さが伝わってきた。直接お話を伺った研究者の名前と専門分野を挙げれば、古典インド学科では、常勤講師である Mugadamuwe Maithrimurthi 博士 (サンスクリット・パーリ・仏教等の講義科目を担当)、Interim Professor の Jörg Gengnagel 博士 (ヴァーラーナシー等のヒンドゥー教儀礼空間の研究)、研究員 Anand Mishra 氏 (古典サンスクリット文法学、ヒンドゥー



教儀礼研究)。近現代インド学科では、上級講師の Christina Oesterheld 博士 (ウルドゥー文学)、ヒンディー語講師の Mag. Gautam Liu 氏、Felix Otter 研究員 (サンスクリット研究、インド建築学)、研究員の Torsten Tschacher 博士 (現在は後述するクラスター・プロジェクトの研究員、シンガポールのタミル系ムスリムの研究、タミル・イスラーム文学史) 等となる<sup>23</sup>。

能力や研究内容にも拘わらず、若い研究者が直面する就職難は深刻である。基本的にチェア (講座を主宰するテニユアのついた正教授) が各講座に 1 つ (1 名) だけのこともあり、ポスト不足が慢性化している。ポストドクを含む多くの新進気鋭の研究者たちが、奨学資金を得たり、後述するようなプロジェクト資金等で雇用されるなど算段を重ねつつ研究を継続している。いきおい国外に就職先を求め、アメリカなどにも進出していくことになるが、アメリカ的「生産性第一主義」「量的成果第一主義」への違和感から、念願のポストを得ても、のびのびと仕事のできるドイツに戻ってくる者もいるとのことであった。

#### (5) ウィリアム・サックス教授 (Prof. Dr. William S. Sax) と民族学 (文化人類学) 講座

シカゴ大学で博士号を得たアメリカ籍の文化人類学者で、ヒマラヤ地域の民族誌・宗教人類学・医療人類学を専攻する。日本の若手ネパール研究者の個人名に言及し高く評価していたのが印象的だった。南アジア研究所がイニシアティブをとる多くの研究プロジェクトにサブリーダー等の形で参画している<sup>24</sup>。研究所の文化人類学講座は、アフガニスタンやパキстанを対象とする初代のカール・イエットマール教授 (Prof. Karl Jettmar)、ネパールを主たるフィールドとする二代目リチャード・バーガート (リヒャルト・ブルクハルト) 教授 (Prof. Richard Burghart) (アメリカ人) などの伝統があり、地域的には北方インドからネパール・ヒマラヤ中心と言うことができる。講座がカバーする広範囲の領域には中央アジアまで含まれるようである。



南アジア研究所の全景  
(イム・ノイエンハイマー・フェルト地区。2011 年 10 月、筆者撮影)

#### (6) 南アジア研究所の重点地域と現地オフィス

南アジア研究所の「インド学」は、既述の通り、過去から近現代にわたる文献研究だけでなく、現代語を用いたフィールド研究にも重きを置いているのが一大特徴である。地域的には、ネパール・ヒマラヤとウルドゥー語圏 (インド・イスラーム社会) を含む北インド世界 (インド・アーリヤ語圏) の研究実績および人的資源がきわめて充実しているのに対し、(ドイツ・インド学に多かれ少なかれ当て嵌まる傾向ではあるが) 南インド・ドラヴィダ語圏については相対的に手薄な印象が否めない。ただしタミル語教育に限り、南インド・ボンディシェリー言語文化研究所で研鑽を積んだトマス・レーマン先生 (Dr. Thomas Lehmann、タミル言語学)<sup>25</sup> がおられ、タミル

語のポスターなどが壁一面に貼られた専用講義室にご案内いただき、先生ご本人や受講生（ドイツ人）とタミル語も交えて会話することができた。しかしながら、南アジア研究所にはタミル語以外のドラヴィダ諸語にわたる教育プログラムは用意されておらず、また南インドの専門家も比較的少人数にとどまっていた、正直なところ、研究所自体の態勢が北インド研究に偏重しているとの感を禁じ得なかった。逆に言えば、南インド関係が充実しさえすれば、まさに完成された「南アジア研究所」として世界で冠たるものになるであろうと思われるのである。

南インド研究の相対的手薄さについては、現地事務所の所在地を見れば得心が行く。現在、研究所はニューデリー（インド）、イスラマバード（パキスタン）、カトマンジュ（ネパール）、コロンボ（スリランカ）の計4箇所に出先を有する。南インドには設けられていない。1995年の紹介記事<sup>26</sup>によれば、その時点でニューデリー、カトマンジュにあり、それ以前はカブール（アフガニスタン）、シンガポールにもあったというから、やはり南インドは蚊帳の外である。ニューデリー事務所を除き、学生・研究スタッフのニーズなどに応じて柔軟に設置（廃止も含む）しているとのことであるから、南インド研究者は比較的少なく推移していることが知られる<sup>27</sup>。我が国の、たとえば京都大学東南アジア研究所が、バンコクとジャカルタに連絡事務所を構えているのに似るが、各事務所とも数十年になんなんとする歴史を有している。ハイデルベルク大学南アジア研究所のように、学問的要請に応じて存廃にフレキシビリティをもたせるやり方もあるのである。

## （7） 附属図書館

2回の訪問時それぞれに、図書部門の専属スタッフやネパール人研究者の案内で、貴重書や写本等を収蔵する研究所附属図書館の館内（開架閲覧室、書庫など）を見せていただき、蔵書のカタログリング方法等についての説明も受けた。南アジア研究に必要な基本文献、研究書、定期刊行物、新聞などはほぼ完備している印象で、貴重書やマイクロフィルム資料も多数所蔵しており、資料の面からも恵まれた環境にあることが実感された。

## V. 南アジア研究所の活動概況 — 大型プロジェクトを中心に —

### （1） 日常的教育活動

南アジア研究所の中でインドロギー系以外の講座の常勤スタッフは、研究所の業務に当たると同時に既存の学部にも所属しており、いわば二足の草鞋を履いた状態となっている。そのため教育上の業務とアドミニストレーション関係の仕事について所属部局間で調整しなければならないという厄介な問題を抱え、また多忙も極めているという。それに対してインドロギー系2講座のスタッフは、専門の授業のほか言語教育<sup>28</sup>にも従事しなければならないかわりに、担当授業も南アジア研究所内で行われ、また研究所専任スタッフということで、別部局との調整の必要がないという好ましい条件も持ちあわせている。いきおい、後述するような研究所の大型プロジェクトの運営で主導的役割も託されることになる。

インド学系の教員には、学期ごとの語学授業以外に、語学研修（集中コース）の実施も課されている。対象言語は、ともにヒンディー語、ウルドゥー語、ベンガル語、タミル語となっている。このほか夏季集中コース（サマーコース）も併設され、今年（2012年）のメニューは、サンスクリット語会話、ネパール語、ウルドゥー語となっている<sup>29</sup>。

## (2) DFGの競争的研究資金による「儀礼のダイナミクス」プロジェクト

「儀礼の動態 (Rituale in Bewegung)」をめぐる通文化的・通宗教的・通時代的総合研究で、日本の学術振興会に相当するようなドイツ研究振興協会 (Deutsche Forschungsgemeinschaft、DFG) からの資金供与をもとに、ハイデルベルク大学が共同研究センター (Collaborative Research Centre, CRC) を立ち上げ、共通テーマを設定し、全学を挙げて共同研究を推進している。2002年から計12年間のプロジェクトで、3つのサブ・プロジェクト (A、B、C) が並行して進められている。いくつかの面で日本のCOEなどとの類似点を有するとも言えよう。以下に当該プロジェクトの概容を示す。

総合テーマ『儀礼のダイナミクスと儀礼の科学 (Ritualdynamik und Ritualwissenschaft)』

統括責任者：アクセル・ミヒャエルス (Axel Michaels) 教授 (南アジア研究所)

Aプロジェクト「伝統と現代の宗教的实践の間の儀礼の動態」

責任者：ミヒャエル・ベアグンダー (Michael Bergunder) 教授 (神学学部)

ウィリアム・サックス (William S. Sax) 教授 (南アジア研究所)

Bプロジェクト「往古の文明における儀礼の動態と再建過程」

責任者：ベルント・シュナイトミュラー (Bernd Schneidmüller) 教授 (史学科)

シュテファン・マウル (Stefan M. Maul) 教授 (近東言語文化学科)

Cプロジェクト「ヨーロッパ社会と中東社会間の儀礼の移転」

責任者：グレゴール・アーン (Gregor Ahn) 教授 (宗教学研究科)

ズザンネ・エンダヴィッツ (Susanne Enderwitz) 教授 (近東言語文化学科)

統括責任者を務めるミヒャエルス教授の話によると、この大型プロジェクトは、南アジア、東アジア、中近東、北アフリカ、ヨーロッパ、アマゾンにわたる宗教 (特に宗教儀礼) に関する総合研究で、3つのプロジェクト・エリアの下に15分野が置かれ、90名以上の研究者が参画する計20件ほどの小プロジェクトが動いているという。

敢えて正確な予算額を問うてはいないが、日本の場合を例示した際の相手方の反応等から、日本の同種のプロジェクトに比べ資金面は潤沢であるとの印象を受けた<sup>30</sup>。

## (3) クラスター・プロジェクト「グローバル・コンテクストにおけるアジアとヨーロッパ」と カール・ヤスパース通文化高等研究センター

南アジア研究所が参画しているもう一つの大型プロジェクトに、2007年10月に開始されたハイデルベルク大学全体の重点プロジェクト “Cluster of Excellence in Asia and Europe in a Global Context: Shifting Asymmetries in Cultural Flows” (CEGC、以下「クラスター・プロジェクト」と略す) がある<sup>31</sup>。

ハイデルベルク大学は、ドイツの学問的競争力の強化に資すべく、連邦政府・州政府のバックアップ、およびドイツ研究振興協会 (DFG) とドイツ学術審議会 (Wissenschaftsrat) からの予算的裏づけをもとに Excellence Initiative 構想に取り組み、文系と理系の学際的な二つの Cluster of Excellence を立ち上げて、先端的研究を強力に推進している<sup>32</sup>。

このうち文系プロジェクトは、先史時代から現代に至る文化交流のありさまを、アジア・ヨーロッパという旧態然とした地理的枠組み離れて再構築する試みに充てられている。学内に3つの

センター（南アジア研究所、東アジア研究所、および歴史関係学科の主要部分）を設け、資金を重点的に配分して研究を強化しようとするもので、差し詰め「学内 COE」のようなものと考えればよい。予算を重点配分することで、先端的研究の推進のみならず就職難にあえぐ研究者に助力する意味合いも大きいとのことである<sup>33</sup>。クラスター・プロジェクトは第 1 フェイズが 2012 年までの 5 年で、さらに第 2 フェイズとして 5 年間の延長が見込まれている<sup>34</sup>。南アジア研究所のミヒャエルス教授が、3 名から構成される本クラスター運営理事の 1 人（共同管理者）を務めている。

クラスター・プロジェクトには、都合 7 つの教授ポストを有する南アジア研究所の全講座が参加して実施されているが、それ以外に本プロジェクトのための新ポスト（cluster professorships）として 5 つが設置されている。それらは第 2 フェイズが満了しプロジェクトが解散しても、たとえばハイデルベルク大学内のいずれかの学科にポストを移転するなどして継続されることになるとのことであった。すなわち、本プロジェクトによりテニユアのついた 5 つの新ポストが創出されたのである。新規の 5 ポストは、Buddhist studies、cultural economic history、global art history、intellectual history、visual and media anthropology の 5 部門に配分され、各専門家によってすでに埋められて、活発な研究が緒に就いている。

クラスター・プロジェクトでは、新ポストを置き得るのみならず、建物の営繕等のインフラにも予算の使用が可能である。プロジェクトの拠点として、旧市街・ビスマルク広場近くのベルクハイム地区に、カール・ヤスパース通文化高等研究センター（Das Karl Jaspers Zentrum für Transkulturelle Forschung (KJC)）を設けており、プロジェクト資金で建物・施設の維持管理がなされている。以前病院だった建物だと、センター内の各所を案内してくれたミヒャエルス教授（センター長）が教えてくれた。たしかに館内には薬剤の臭気がかすかに漂っている。センターの所在地（Voßstraße 2, im Stadtteil Bergheim）は、カール・ヤスパースが勤務した旧ハイデルベルク大学病院の精神科病院（Psychiatrische Klinik）のそれと一致する。ヤスパースゆかりの建物だったのである。今や、この数層から成る独立したビル内に、南アジア関連の多くの研究室や作業室が並び、研究者たちが行き交っている。

本センターは、日常の研究活動のほか、講演会、研究会、ラウンドテーブルに会場を提供するとともに、年毎のコンフェレンスの開催や国際サマースクールの企画・運営なども行っている。実際に、2011 年に訪れた際には、その数日前にニューデリーでクラスター関係のシンポジウムを終えたばかりとのことであった。外国の研究者や研究機関との学術交流も活発で、我々の訪問時にも、ヒンドゥー神話学の世界的権威であるヘブライ大学のデヴィッド・シュルマン（David Dean Schulman）教授がセンターに来訪していた。

国際性を売りにするプロジェクトである以上、英語による成果の生産が強く求められており、スタッフにはそのプレッシャーもあるという。プロシヤから研究成果まで、すべて英語によるものが求められるため（第二言語としての英語の運用能力は、傍目からは十分に高いように見えるにも拘わらず）、ドイツ語話者にとってやりにくい面もあるというのである。南アジア研究者から伺ったわけだが、「南アジア研究」が現地語の知識に加え英語の運用能力を強く求める分野であり、各人が英語に堪能なのは誰の目にも明らかとはいえないものの、英語への彼らなりの苦手意識・違和感が吐露されて、同様に英語による成果発信を奨励されている日本人研究者として、奇妙な安堵感を覚えたのであった。

#### (4) 日本との協力関係構築に向けて ― 期待と課題 ―

日本との学術交流の可能性についても意見を交わした。以下、彼らの考え方を記す。

現在南アジア研究所は複数の大型プロジェクトを抱えており、常勤スタッフを中心に忙しいことは事実だが、教授レベルの者が日本で開催されるシンポジウム等に発表に向くことなどは朝飯前である。それはよしとして、より望ましい参画形態は、ポスドクなどを含む若手研究者が関与でき、彼らにとっても有益なものであるということだ。学生たちの相互交流が促される形が何よりである。たまさかシンポジウムに招聘されるような単発的な関係を超えて、ポスドクなどの交流や諸々の機会を与えるようなプロジェクトであって欲しい。茫漠とした協力関係ではなく、特定の分野やフィールドを共有するような人々同士が、互いに啓発し合い研究を深化し合えるようなものが望ましい。便宜的に広いテーマを設定して、通り一遍の行事（シンポジウムなど）を催すのではなく、願わくは、真の意味で研究内容や研究課題を共有する者同士が知見を深め合い、双方に利益が上がるような形にしたいものだ。成果を発信（研究発表や出版）する場や機会も設けて貰えればと思う。

共同研究での言語選択についても示唆があった。日本との間で共同プロジェクトを遂行するような場合、使用言語の選択によっては、つまり具体的には、日本語が発信等の主要なミディウムになってしまうと、自分たちが日本側とどれだけ実体的な協力関係を築いていけるか一抹の不安が残るとの懸念が吐露されたのである。彼らにとっては基本的に欧文で表記されたものしか業績としてカウントされないであろうから、もっともなことである。

進行中の大型プロジェクトに関連した日本との協力関係については、クラスター・プロジェクトに関して言えば、2012年までの第1フェイズではすでに活動の枠組みや内容が決着済みで現段階で変更する余地はないため、協定のような形の正式な協力関係を結んで推進することは難しい。ただし第2フェイズに入るにあたっては、第1フェイズと同一の内容では認可されないし意味もないため、我々は、新しいカウンターパート、アドバイザー、ないしアイデアを求めている。そのような文脈から、将来的に協力関係を築くことは十分に可能であるし、歓迎するところだとのことであった。

第1フェイズに関しては、上記のように正式プログラムに載せる形での実施ができないにしても、たとえば講座レベルや個人研究者のレベルでは、日本のプログラムに招請されて何らかの役割を果たすことは全く妨げられないし、何の問題もないとのことである。

概略を示せば以上のようなご意見内容であった。日本との研究協力には基本的に前向きとの印象を受けて帰国の途についた。

#### Aknowledgements:

I express my sincere gratitude to all the staff members of The South Asia Institute, Heidelberg University, especially Prof. Dr. Axel Michaels, Prof. Dr. Hans Harder, and Dr. Martin Gieselmann.

#### 注釈

- 1 執筆に当たっては、(正確な刊行年等が不詳のものも多いため) 出典を一々表記しないが、現地で頂いた同大学または同研究所発行のプロシユアやパンフレット類も自由に参照した。

- 2 “Institut (英 institute)” を便宜上「研究所」と訳したが、関連する講座群を傘下に束ねた学部ないし研究科のような学内組織と了解いただきたい。講座数等の点から言えば、規模的に本研究科の「専攻」にも似る。南アジア研究所の場合、専任教員(インド学2講座所属教員)は、全学の学生に対する外国語(南アジア諸語)の授業を担当しつつ、所属の大学院生の指導にも当たる。
- 3 実際、後述するミヒャエルス教授やサックス教授などの面々も、キャンパス内およびキャンパス間の移動に専ら自転車を用いている様子である。
- 4 筆者はヘンケル先生、当時ご所属の教皇庁立ウルバニアナ大学、および同大学刊行の書誌学誌について、本学附属図書館報に紹介文を寄せている(山下博司「<ビブリオグラフィ・ミッシヨナリア>とウルバニアナ大学図書館」『木蓮子』27.1、2002年、3-7頁)。
- 5 なお、国立民族学博物館での「現代南アジア地域研究プロジェクト」2010年度第1回研究会(2010年5月22日)において、「ハイデルベルク大学南アジア研究所 (Südasiens Institut, Universität Heidelberg)」の題目で、2010年3月訪問時の報告を行っている。
- 6 QS世界大学ランキングでは、2010年がドイツ1位・世界51位、2011年がドイツ1位・世界53位、2012年が(ミュンヘン工科大学に次ぎ)ドイツ2位・世界55位にランクされる。すなわち、総合大学ではベルリン自由大学などを抑え常にドイツの首位に立つ(The Times World University Rankings 2012-13では、ゲッティンゲン大学に次ぎドイツ2位)。
- 7 <http://www.uni-heidelberg.de/university/> (閲覧日2012年8月31日)。
- 8 赤木登代「ドイツ第一波女性運動における女子教育(第I報) — 市民層の理念および実践 —」『大阪教育大学紀要』第1部門第55巻第2号(2007年2月)、5頁。ちなみに東北大学は、周知のように、1913年に日本の大学として初めて女子学生3名を受け入れている。
- 9 南アジア研究所の設置はヤスパースの存命時であったが、彼が研究所と直接の関わりをもったとの証拠はない。
- 10 梅原猛『日本文化論』講談社、昭和51年、27-30頁を参照。
- 11 <http://www.iasn.nl/iasn/iasn6/south/heidel.html> の Dietmar Rothermund (当時南アジア研究所歴史学教授) による記事(2012/10/17閲覧)。
- 12 英国スコットランドのエディンバラ大学にも、類似の機関として南アジア研究センター(1988年設立)があるが、先駆性や組織の歴史・沿革、カバーする分野の包括性、活動の現況等においてハイデルベルクに一日の長があろう。
- 13 ドイツ・インド学と日本のそれとの関係史については、西村実則『荻原雲来と渡辺海旭 — ドイツ・インド学と近代日本 —』大宝輪閣、2012年などを参照。
- 14 したがって“moderne Indologie”という語は、従来型のインド学に馴染んだ者からは、「現在行われているような、今様の古典インド学」の意味にも捉えられ兼ねないであろう。
- 15 ただし、純粋な学問的な要請以外に、おそらく財政面での事情も深く関与している。原油を産出する西アジア地域の研究に比べ、容易に実用的利益をもたらさないインド古典学に対し、連邦政府が予算を削っているという事情もあるようだ(北田信「花咲く菩提樹の下で — ドイツ、ハレ市の南アジア学 —」『東方』第28号、2008年、180頁)。近現代インドの研究にシフトする、あるいは少なくとも近現代にも同等の配慮を加えようとする動きは、ハイデルベルクに限らず、ドイツ全体にわたる趨勢であるとも言えるのであろう。
- 16 自らもヒンドゥー教を研究する Gérard Colas は、学術出版の書評を扱うウェブページ <http://lhomme.revues.org/index2761.html> (2012/10/16閲覧)で、ミヒャエルス教授の著書 *Der Hinduismus: Geschichte und Gegenwart* (München, Verlag C. H. Beck, 1998) について以下のように解説している。“L’auteur tire sa documentation de l’indologie textuelle et de l’ethnologie, estimant d’ailleurs qu’il est temps de fonder une discipline qui les réunirait (sans que cela se fasse aux frais de « l’indologie philologique », ajoute-t-il), et qu’il nomme « Ethnoindologie ». L’interrogation que suscite cette ambition, à savoir celle de la relation entre l’indologie et d’autres disciplines qui étudient l’Inde (l’ethnologie, mais aussi les disciplines historiques autres que la philologie), constitue un beau sujet de débat.”
- 17 ここではベンガル語、ビルマ語、カンナダ語、マラーティー語、タミル語、ウルドゥー語が開講された。前掲 Dietmar Rothermund, <http://www.iasn.nl/iasn/iasn6/south/heidel.html>。
- 18 前掲 Dietmar Rothermund, <http://www.iasn.nl/iasn/iasn6/south/heidel.html>。
- 19 2010年、筆者が訪れる直前に東京大学の辛島昇名誉教授(南インド中世史)がハイデルベルクに長期滞在し、

研究活動のほかレクチャーなども行って帰られたとのことであった。当研究所の南アジア史学講座と日本との最近の学術交流の一例である。

- 20 ハーダー教授の研究内容やお人柄等については、北田前掲論文、180-182 頁を参照。
- 21 山下博司編『タミル語 ― 読みものと会話 ―』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所、1986 年、全 iii+149 頁。
- 22 北田、前掲論文、180 頁。
- 23 加えて、大谷大学から訪れていた Shobha Rani Dash 博士（オリヤー語版『マハーバーラタ』の研究）ともお話しすることができた。
- 24 ただし大型プロジェクト自体は、ミヒヤエルス教授を中心とするドイツ人スタッフが核になって動かしているとの印象をもった。
- 25 主著 *A Grammar of Modern Tamil*, Pondicherry Institute of Linguistics and Culture, 1989。
- 26 前掲 Dietmar Rothermund, <http://www.ias.nl/iiasn/iiasn6/south/heidel.html>。
- 27 かつては、Prof. Clive Bell（経済学）、Prof. Hans Georg Bohle（地理学）、Prof. Anna Libera Dallapiccola（美術史）など、南インドを対象分野とする教授たちがいたことも事実である。前掲 Dietmar Rothermund, <http://www.ias.nl/iiasn/iiasn6/south/heidel.html>。
- 28 サマーコースは、ハイデルベルク大学以外の学生や一般人にも受講が開放されている。
- 29 ウルドゥー語コースは、今年はエアフルト大学を会場に開催される。
- 30 個人（ないし講座）に配分される研究資金の額は、人類学科のウィリアム・サックス教授のウェブページにアップロードされた CV の記載内容からもある程度推測し得る。Cf. [http://www.sai.uni-heidelberg.de/ethno/pages/staff/documents/Curriculum\\_vitae\\_sax.pdf](http://www.sai.uni-heidelberg.de/ethno/pages/staff/documents/Curriculum_vitae_sax.pdf)（閲覧日 2012/10/18）。
- 31 本プロジェクトの趣旨や組織等については、ミヒヤエルス教授に加え、中国学者で南アジア研究所の当該プログラム管理者マルティン・ギーゼルマン博士（Dr. Martin Gieselmann）と個別に面談してご教示いただいた。
- 32 理系のクラスターは“Cellular Networks”と名づけられ、生命科学による最新成果の医工学的応用を目指す試みである。<http://www.cellnetworks.uni-hd.de/>（閲覧日 2012/10/19）。
- 33 博士号取得者でも国内の就職状況は困難な状況で、キャリアをつける必要がある。国外にも進出してポストを探す必要もあり、そのための実績を積む必要があるとのことである。
- 34 2012 年 7 月 2 日付け研究所 HP の「新着情報」により、5 年の延長許可を知り得た。